

世界が広がる

松澤創一郎 (高68回)
東京大学理科I類1年



●まつざわ・そういちろう
飯田市上殿岡出身。高校では弓道班に所属。趣味は麻雀・数独など。物理学全般に興味があるので、大学では相対論、量子論、宇宙論など幅広く学び、将来はそれらの工学分野への応用を考えたい。

1年間の浪人生活を経て、この春東京大学に合格することができた。浪人時代の単調に同じ内容を繰り返すだけの日々とは比べ物にもならないくらい1日1日の密度が濃いので、入学してからまだ2か月しか経ってないのかという感じがする。

東京大学と他の大学とを差異化する最たるものは、やはり進学振り分けという独自の制度だろう(今年度から進学選択という名前に変わったらしい)。東京大学では1、2年次は全員教養学部在籍し、3年に上がる段階で自分が進みたい学部と学科を選択する。つまり1、

ついて学ぶゼミで脳波を使ってドローンを操縦してみたり、などと自分が今まで触れてこなかった世界に触れられるのも非常に楽しい。教養学部在籍することの醍醐味は、既知の概念と未知の概念との遭遇、言い換えれば、熟知しているものとそれまで見向きもしてこなかったものが出会うことによる全く新しいニュートラルなアイデアの創出にあるのかもしれない。

また、大学関連での人との出会いがとにかく新鮮である。東京大学はクラス制をとっているのだが、私のクラスには地理オリピックに出場した人、地学オリピックに出場した人、TOEIC990点の人、JAXAのプロジェクトで研究に参加し成果を収めた人、ロボットの全国大会に出場した人、タイからの留学生、他諸々の有名進学校出身者がいる。私には彼らのような経験が無いので、自分のクラスにそのような凄い人がたくさんいることを知った当初はひたすら驚いてばかりであった。大学の部活のOBにJAXAやトヨタで働いている人がいると知ったときも同じ感覚に陥り、「これが東大かあ」などと感嘆せずにはいられない。重要なのは、東京大学ではそのような体験が日常化している点である。日常であるがゆえ、彼らとの距離が遠く感じられず、気軽に会話をすることができている。そんな環境に現在身を

2年の間に興味の方向が変わっても、3、4年次ではその方向で専門的な勉強をすることが可能ということである。これは一見夢のような制度だが、各学部には定員が設けられ、しかも成績順に席が埋まっていくため、人気の学部学科を選択するには各講義で好成绩を残すことが求められる。東大生は苦しい受験勉強を乗り越えてなお、試験勉強を勝ちぬかなければならないのだ。このことに私は矛盾を感じざるを得ない。特定の科目にとらわれず多方面に興味を広げていくことが1、2年次に教養学部所属する意義であるのに、試験で高得点を取らなければならないために得意科目の講義ばかりを取るようになる。周囲が優秀な学生ばかりであることを考慮すれば、これは尚更である。

既存の制度の文句ばかり垂れてきたが、その一方で大講義での講義が面白いことも事実である。私は理科I類という大部分の学生が工学部、理学部に進学する科類に所属している。そのため、必然的に数理系の講義を多く履修しており、数学や物理学、情報、統計などに関する新たな知識を獲得することももちろん楽しいと感じるのだが、文系の(しかも、英語の speaking が堪能な)学生と英語で discussion したり、第二外国語の中国語の講義で今までのしたことのない発音を試みたり、脳科学に

置けていることをこの上なく幸福に感じる。

部活動は、中学校や高校ではできないことをやりたいと思えば、航空部で活動することに決めた。航空部と聞いて鳥人間コンテストなるものを連想されるかもしれないが、そうではなく、グライダー(写真参照)を自らの手で操縦することが活動目的である。グライダーとは動力のない飛行機のようなもので、上空では風から揚力を受けて滑空する。地上500m〜時速90km飛行を操縦するのだからなかなかスリリングである。初心者である私は教官とともに搭乗しているのだが、いつか一人で空を舞えるようになりたいものだ。

充実した大学生活を送れていることに感謝するとともに、

将来の日本を担うエリートとしての自覚を持ち、勉学に励んでいきたい。

